

嗅覚表現自動詞ニホフの意味の下降について

——「名詞＋スル」との関連から——

池 上 尚

一 はじめに

現代語のニオウは、一語で〈プラス／マイナスの意味〉(以下、 $\langle + / - \rangle$ の意味)両方を表す自動詞である。⁽¹⁾しかし、古代に目を向けてみると、ニホフは一語単独で専ら $\langle + \rangle$ の意味を表すことに気づく。ニホフは、いつどのようにして意味が下降していったのであるうか。また、なぜ一語が両極の評価性を表し得るのであるうか。

従来の嗅覚表現研究は、上代・中古におけるニホフやカヲルを取り上げ、その美意識的側面に焦点化した表現意図論が多かった。特にニホフは、視覚から嗅覚へ感覚領域の変化した語として取り上げられるばかりで、 $\langle - \rangle$ の意味を表す側面については積極的に論じられてこなかった。⁽²⁾ $\langle - \rangle$ の意味を表すニホフに着目した工藤(二〇一〇)はあるものの、この語の意味の下降の過程については十分に明らかにしていない。

そこで、本稿では、ニホフがはらむ上述の意味変化の問題を、

知覚動詞と同じ働きをする自動詞の用法「名詞＋スル」(特に「ニホヒ＋スル」)と比較しつつ考察する。現代語における「名詞＋スル」(特に「ニオイ＋スル」)は、連体修飾を伴い様々なおの描写を可能にする分析的・複合形式として、総合的・単純一語のニオウとともに $\langle - \rangle$ の意味領域をもカバーする。 $\langle - \rangle$ の意味を表す表現形式として、ニホフと「名詞＋スル」とが共存するに至るまでの、意味・用法の分担過程を考察することで、ニホフの意味変化をより大きな次元で捉えてみたい。その際、一般的に言われるニホフの感覚領域の変化についても触れ、本稿の嗅覚表現の捉え方を明らかにする。

なお、 $\langle + \rangle$ の意味に関して、専ら $\langle + \rangle$ の意味を表すカヲルやクンスとの関連も問題となる。そもそも、ニホフに意味の下降が生じた要因は、この二語の意味・用法が限定的であった／限定化したことに求められよう。本稿では、紙幅の関係でこれらの類義語について詳述できないが、ニホフの意味の下降の過程に関しては、「名詞＋スル」との比較で最低限論ずることができる

考える。カナルやクンズの語史については別稿を期したい。

二 用例の分類基準—意味の認定—

用例は、表一にまとめたように、とる対象・形式によつて意味を判断する。

表一 用例の分類基準

対象	形式		意味	
	単独使用	（「-の意味」を表す修飾成分を伴う）	+	表二中での略称
穢れ以外	①	②	n	修飾成分—n
穢れ	③	④	-	単独—

まず、とる対象（嗅覚刺激を発する事物）が穢れ（禁忌とされる死人や排泄物・腐敗した飲食物・獣）の場合のみ、単独で（-の意味）を表すとする。対象が穢れ以外の場合、単独で積極的に（+の意味）を表すとは考えにくく、単独で（+の意味）を表すと暫定的に考えた。次に、形式により、①「単独使用」、②「-の意味」を表す修飾成分を伴う」に二分類する。③は、マイナスの評価性を持つ語句がニホフを連用修飾する場合（例…臭くニホフ）、または、「名詞＋スル」の名詞を連体修飾する場合（例…臭きニホヒがスル）を指す。この場合、ニホフ・「名詞＋スル」は単独で（中立的な意味）を表し、修飾成分を含めた表現全体で（-の意味）を表すとする。つまり、穢れを対象としてとる場合でも、形式が③であれば、単独ではあくまで（中立的な意味）を表す、と考

るのである。なお、（+の意味）を表す修飾成分を伴う場合は、（より一層快いにおいがする）ことを表すとも考えられるため、（中立的な意味）の認定の判断基準としない。

単独で（+の意味）を表すと分類した用例には、（中立的／-の意味）を表す用例が含まれている可能性ももちろんある。しかし、対象とそれにおいに対する現代的評価は、主観に陥る恐れがある。本稿では、明示的な言語表現を判断基準に、積極的に（中立的／-の意味）を表すと認められる用例に着目して、ニホフの意味の下降を考察していきたい。

なお、筆者は意味の下降を次のように考える。単独で（+の意味）を表していた語が、（-の意味）を表す修飾成分を伴い、語自体が（中立的な意味）を表すようになる（意味の下降の初期段階）。さらに、（-の意味）を表す修飾成分を伴わずに、一語単独で（-の意味）を表すようになる（意味の下降の定着）。つまり、意味の中立化を、意味の下降の二段階として捉えるということである。

三 調査結果と考察

調査結果は、資料ジャンルごと・時代ごとにとまとめて示す。用例の得られた資料の詳細は本稿末尾の別表を参照されたい。なお、用例を掲げる際には調査語以外の表記を適宜私に改め、調査語に傍線、対象に点線、修飾成分に波線を付し、筆者による補足を「〔 〕」、諸本による補足を「〔 〕」、出典末尾に資料ジャンルを「〔 〕」で示した。

表二

資料ジャンル\形式・意味	ニホフ			[ニホヒ+スル]		
	単独+	修飾成分-ini	単独-	単独+	修飾成分-ini	単独-
記紀万葉・上代計	57	0	0	1	0	0
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	57			1		
仮名散文Ⅰ期・中古計	126	1	0	2	0	0
	99.2%	0.8%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	127			2		
仮名散文Ⅱ期	50					
説話	23		1			
和漢混淆文Ⅰ期	14					
中世前期計	87	0	1	0	0	0
	98.9%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
	88			0		
和漢混淆文Ⅱ期	4					
室町物語	2					
抄物・キリシタン資料・狂言台本	10			4		
中世後期計	16	0	0	4	0	0
	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%
	16			4		
狂言台本Ⅰ期	3			2		
仮名草子	6		2		1	
浮世草子	1				2	2
嘶本Ⅰ期	9		2	6	1	
井原西鶴作品	9					
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	8					
近世雜Ⅰ期	3		2			
俳諧Ⅰ期	20					
近世前期計	59	0	6	8	4	2
	90.8%	0.0%	9.2%	57.1%	28.6%	14.3%
	65			14		
浄瑠璃Ⅱ期	2			1		1
狂言台本Ⅱ期	8		1	8		1
談義本	4				1	
嘶本Ⅱ期	16			6	5	
近世雜Ⅱ期	2			1	2	
洒落本			1	1		1
黄表紙				2	3	
読本	6					
滑稽本	6		2	3	6	
人情本	3					
俳諧Ⅱ期	14		1			
近世中後期計	61	0	5	22	17	3
	92.4%	0.0%	7.6%	52.4%	40.5%	7.1%
	66			42		
総計	349	1	12	37	21	5
	96.4%	0.3%	3.3%	58.7%	33.3%	7.9%
	362			63		

三・一 ニホフの意味の下降と「名詞＋スル」

(一) 上代

上代のニホフ・「ニホヒ＋スル」は、専ら単独で「＋の意味」を表し、意味の下降は認められない。なお、例②のように、従来視覚表現と見なされてきたニホフ（ニホヒ）を含めて論ずる理由については、筆者の嗅覚表現の捉え方と併せて後述する。

①手に取れば袖さへ丹覆女郎花この白露に散らまく惜しも〔万葉集・巻一〇・二二一五〕〔記紀万葉〕

②紅に染めてし衣雨降りて爾保比波雖為うつろはめやも〔万葉集・巻一六・三八七七〕〔記紀万葉〕

(二) 中古

中古に至ると、「－の意味」を表す修飾成分を伴い「中立的な意味」を表すニホフが見えることから、この頃、ニホフに意味の下降が生じ始めたと考えられる。

③「樞戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚などまさなくしたる部屋にいる」君は、万に物の香くさくにはひたるがわびしければ、いとあさましきには、涙もいでやみにけり。〔落窪物語〕

〔仮名散文Ⅰ期〕

落窪の姫君の幽閉された部屋に漂う「物の香」〔酢、酒、魚など〕が入り混じったにおいは、穢れなどの不快なおいというよりも、快くはないにおいではあるまいか。一語単独で「－の意味」を表す〔－〕クサシではなく、「クサシ＋ニホフ」とあることから、それは裏付けられる。ニホフの意味の下降は、まず、こうした快

くはないにおいの描写に際して生じ、次第に、一語単独で不快なおいを表すように変化していったと推測される。

(三) 中世前期

中世前期末の『沙石集』(二二八三)には一語単独で「－の意味」を表すニホフも見え、意味の下降が進行する(④)。「－の意味」を表す「ニホヒ＋スル」は見えないものの、「名詞＋スル」のうち〔カと読む可能性の高い〕香＋スル〕には、「中立的な意味」を表す用例が見えた(⑤)。これは、中世前期以前において、「＋／中立的／－の意味」を表す嗅覚表現名詞としてニホヒよりもカが多用された(池上二〇二二b)ためである(中世後期以降は、ニホヒとカが交替する)。すなわち、自動詞的用法「名詞＋スル」においても、「ニホヒ＋スル」に先んじて「香(カ)＋スル」が「中立的な意味」を表すに至ったのである。

④若キ女房、礼盤近ク居テ、眠リケルガ、堂ノ中モ響ホドニ、

下風ヲシタリケルガ、香モ事ノ外ニ匂テ、興サメタル所ニ、

導師是ヲ聞テ、「簫・笛・琴・篳篥・琵琶・鏡・銅鈸、其音

モタヘナリト云ドモ、香氣ヲ具セズ。多摩〔「羅」〕跋香多伽

羅香、其香カウバシト云ヘドモ、音声ヲソナヘズ。今ノ御下

風ニヲキテハ、声モアリ。匂モアリ、聞ベシ、カイフベシ」

〔沙石集・巻六・八〕〔説話〕

⑤「山懐ヲスギ往間、人ハルカニタエタル所」エモイハス嗅香ス。漸々寄テ見レバ、草枯レ、イナラヌ所アリ。鳥獸ノダニ見ズ。嗅ノタヘガタケレバ、鼻ヲ塞ギテ、アヤシサニ強ヨ

リテミレバ、一人死人アリ。(打開集・第九話・玄奘三藏心経事)

〔説話〕

(四) 中世後期

中世後期において、(中立的／＼の意味)を表す用例は、ニホフ・〔名詞＋スル〕ともに未見である。しかし、『羅葡日辞書』(一五九五)には(中立的な意味)で使用されたニホフが散見され、前代までの意味・用法を引き継いでいることが分かる。

⑥ Spurus... Cusagi monoxuqi aru monoi xixiqu niud mono.
(羅葡日辞書)

一語単独で、あるいは、修飾成分を伴い表現全体で(一の意味)を表すニホフ・〔名詞＋スル〕が見られない要因として、この頃発達し始めた接尾辞・クサシの存在が考えられる。中世後期に限らず、今回の調査で得られた全用例数が少ないことも、(一の意味)を表すのに専ら形容詞(一)クサシが使用されたことと関係するか。

(五) 近世前期

一語単独で(一の意味)を表すニホフ六例は、当代の用例数の約一〇%を占める。中古に始まるニホフの意味の下降は、この頃には定着し始めたようである。ただし、意味が下降した後も、単独で(一の意味)をも表し続けていることに注目したい。現代語のニオウのように、一語で(一／＼の意味)両方を表すニホフが、近世前期に誕生したのである。

⑦ 一 西浄「雪隠」をかう屋下いふ事に二説あり。一にハカ

ミををろすと云事シヤ。又一二ハにはふといふ事シヤ。(寒

川入道筆記)〔断本I期〕

ニホフは、意味の下降が進行する過程において(中立的な意味)を表すこともあったが、前掲例③以降はそうした用例が見えず、専ら単独で(一／＼の意味)いずれかを表す語となった。これとは対照的に、「ニホヒ＋スル」は、それ自体はあくまでも(中立的な意味)を表し、修飾成分を含めた表現全体で(一の意味)を表す用例が多い。なお、これは、「名詞＋スル」全般に指摘できる傾向である。

⑧ 大警は水を含むものなれば。あしきにはひする事なり。(男色十寸鏡・上・少年若道のしたて気をとをす事)〔浮世草子〕

⑨ 客人申さる、「火の傍に何ぞくばりたるか、あしきかさかする」と言ふ。亭主聞て、人を呼び、「火の傍に、何ぞあるか見よ、何やら、わるいからするぞ」と、言ひ付ければ、……「火のはたを、よく見て御ざれとも、なにも御ざらぬが、御方様の火にあたりて御座る」(昨日は今日の物語・上)〔断本I期〕

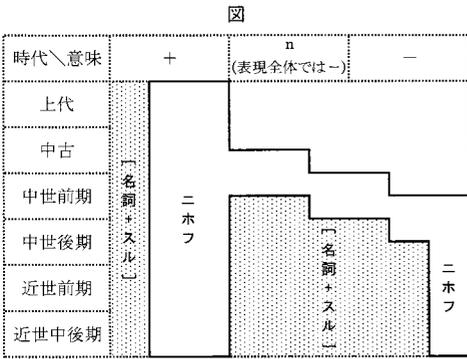
(六) 近世中後期

上述のような意味・用法の分化は、近世中後期にも引き継がれる。ニホフは専ら単独で(一／＼の意味)いずれかを表し(⑩)、「ニホヒ＋スル」をはじめとする「名詞＋スル」は(一の意味)を表す修飾成分を伴い、(中立的な意味)を表す場合(⑪)が多

いのである。ただし、後者は結果的に表現全体で（-の意味）を表すことになるため、ニホフよりも「名詞＋スル」の方が（-の意味）を表すのに使用される傾向にあると言える。

⑩「ヲヤもふ、そふじ」「便所汲掃除人」がきたさふだ。いつそ匂ふよ。廊下には寝ずの番、多くの行灯を並べ、掃除してゐる。」（青楼昼之世界錦之裏）（洒落本）

⑪鬼瓦「……べんく草や性根草が小沢山に生たが、猫の穢物の乾かたまりと一緒に、ぶんく鼻へ這入る。とんだ所で草いきれを艱物だぜ。まだおつりきな匂がするやうだ。フンく。」（大千世界楽屋探・初編・下）（滑稽本）



以上見てきたニホフの意味の下降と、その意味変化に「名詞＋スル」がどのように関わっているかをまとめると、図のようになる。二つの表現形式が共存し続け、語彙体系としての均衡を保つためには、（+／中立的／-の意味）におけるニホフと「名詞＋スル」との棲み分けが、必要不可欠であったにちがいない。ところで、なぜこのよ

うな意味・用法の分担が生じるのであろうか。池上（二〇二二）で指摘したように、少なくとも嗅覚表現においては、時代が下るにつれて、おおいの種類を具体的に表そうとする「表現の具体化への欲求」が高まる。自動詞の範疇においても、この表現上の欲求に応えられる形式として、おおいの種類を具体的に表現できる連体修飾成分^①を伴いやすい名詞をその形式に含む「名詞＋スル」が好まれたのではなからうか。しかし、自動詞ニホフも、連用修飾成分を伴い、より具体的に表現することは可能である。先の表現上の欲求とはまた別に、ニホフが（単独か、修飾成分を伴うかを問わず）（-の意味）を積極的に表しにくい要因が存するのではないか。

三・二 ニホフは、なぜ（-の意味）を表しにくいのか

この問題を考察するにあたり、表一ではほとんど触れなかった（+の意味）に着目する。ニホフが意味の下降の後も（+の意味）を表し続ける理由を明らかにすることで、（-の意味）を表す語としては積極的に使用されない要因が見えてこよう。

表三では、単独で（+の意味）を表す用例を具体的な対象によつて細分類し、用例数の分布を示した。対象は、植物・薫物・身体・精彩・飲食物・その他の六つに分類した。

ここで言う身体とは、色艶とも呼べる人間の美しさや、往生人・神仏の登場に伴うおいを指す。また、精彩は、色彩・光彩の総称として用いている。ところで、ニホフは、こうした身体や精彩を対象とする（前掲例②）がゆえに、視覚表現語と見なされ

表三

資料ジャンル\対象	ニホフ						[ニホヒ+スル]				
	植物	薫物	身体	精彩	飲食物	その他	植物	薫物	精彩	飲食物	その他
記紀万葉	44(44)	0	4(4)	9(9)	0	0	0	0	1(1)	0	0
上代計	57(57)						1(1)				
仮名散文Ⅰ期	72(55)	24	30(1)	0	0	0	1	1	0	0	0
中古計	126(56)						2				
仮名散文Ⅱ期	28(18)	14	8(2)								
説話	10(8)	6	4		1	2(1)					
和漢混淆文Ⅰ期	11(3)	1	2								
中世前期計	49(29)	21	14(2)	0	1	2(1)	0	0	0	0	0
	87(32)						0				
和漢混淆文Ⅱ期	4(1)										
室町物語	1				1						
抄物・キリシタン資料・狂言台本	7(1)	2				1	1	2		1	
中世後期計	12(2)	2	0	0	1	1	1	2	0	1	
	16(2)						4				
狂言台本Ⅰ期	2(2)	1(1)								2	
仮名草子	6(4)										
浮世草子		1									
噺本Ⅰ期	4(4)	2(1)			1	2				4	2
井原西鶴作品	6(6)				1(1)	2(2)					
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	5(2)	2(2)				1					
近世雑Ⅰ期	3(3)										
俳諧Ⅰ期	12(11)	4(3)			1(1)	3(2)					
近世前期計	38(32)	10(7)	0	0	3(2)	8(4)	0	0	0	6	2
	59(45)						8				
浄瑠璃Ⅱ期	2(2)							1			
狂言台本Ⅱ期	3(2)	5(5)					1			7	
談義本	4(1)										
噺本Ⅱ期	5(1)	6			1	4		4		1	1
近世雑Ⅱ期	1	1						1			
洒落本										1	
黄表紙								1		1	
読本	5(1)					1(1)					
滑稽本	1	1			4					2	1
人情本	2(1)				1(1)						
俳諧Ⅱ期	6(4)	2(2)			1(1)	5(5)					
近世中後期計	29(12)	15(7)	0	0	7(2)	10(6)	1	7	0	12	2
	61(27)						22				
総計	244(174)	72(14)	48(7)	9(9)	12(4)	21(11)	3	10	1(1)	19	4
	406(219)						36(1)				

(): それぞれに含まれる和歌・謡などの韻文の用例数(内数)を示す。

てきた。そして、後に嗅覚表現語としての使用に偏ることを以て、感覚領域の変化が説かれたのである。ニホフが純粹な嗅覚表現語として確立する過程は、表三によっても確認される（身体は中世後期以降、精彩は中古以降、それぞれ用例が見られなくなる）が、それ以前のニホフが視覚表現に専用の語であったとは言えないと筆者は考える。そもそも、視覚情報である精彩などと嗅覚情報であるにおいては、(発散) という共通項を有する「氣」であり(E・ミンコフスキー一九八三)、峻別は困難である。におう／におわないの判断が恣意的な文化行為である(A・コルバン一九九〇)とすればなおさらである。「氣」が具体的に何を含み「精彩」で言い尽くされるか否か)、嗅覚表現語として確立する以前のニホフをどのように捉えるべきかは別稿で詳述することにし、ここではひとまず、視覚情報と嗅覚情報との連続性・共通性を表現する語としてニホフを捉え、従来、視覚表現的であるとされてきた用例をも含めた広義の「嗅覚表現」を扱っている。視覚であれ嗅覚であれ、また双方が融合した感覚であれ、そこに付随する評価性の変化は起こり得る。嗅覚表現語として確立するまでの感覚領域の変化と、意味の上昇・下降といった評価性の変化とは、別に考えたい。

(一) 鑑賞としての対象か、実用としての対象か

まず、ニホフと「ニホヒ＋スル」との、とる対象のちがいにについて見てみる。

植物・薫物・身体・精彩は、総計・各時代の計を問わずニホフが圧倒的に多い。この語に意味の下降が定着する近世以降であっ

ても、植物(12)・薫物(13)を対象として積極的にとり続けている(近世前期は約八〇%、近世中後期は約七〇%を占める)。

12袖のかほりもにほひ来る色町の夕涼ミ、螢なげこむあだ人に誘はれ、貧しき男鳴に行、御影にてかこるに枕を並べ、(遊小僧・四・色はまよひの初的事)〔断本I期〕

13今を春迎と匂ふ紅梅の盛り、(庚申講・一・みだれ髪)〔断本II期〕

また、上代・中古・中世前期におけるニホフは身体を対象としてとる場合があるのに対し、「名詞＋スル」には、こうした対象が一切見られないということも特筆すべき点である。

14御顔の色は紅梅の咲き出でたるやうににほひつ、涙も落ちぬべく見ゆる御まみの、いと心苦しげなる(とりかへばや物語・上)〔仮名散文II期〕

15かやうの行にてをばりを取る人、まのあたり異香にほひ、紫雲たなびきて、其の瑞相あらたなるためしおほかり。(発心集・第三一・六)〔説話〕

鑑賞の対象にされやすい植物や薫物・精彩、物語世界や異世界の描写において対象にされやすい身体についてはニホフが優勢であるのに対し、先の三つの対象よりは日常的・実用的で卑近な食物については、一貫して「名詞＋スル」が優勢である。

16(伯藏主)／さりながら、何やらかうばしひにほひがいたすが、何物をおいでますぞ……はあ、わかぬすみを、油あいにしすまひておひたは、か、つたが道理じゃ……(伯藏主)／ますまひか、する(虎明本・釣狐)〔狂言台本I期〕

以上のことから、ニホフ／「名詞＋スル」の使い分け意識は、描写する対象そのものへの意識のちがいが（鑑賞／実用）が反映されやすいと指摘できるのではなからうか。

(二) 日常語的か、文章語的か

対象への意識に関連して、出現しやすい文体・資料ジャンルについても見てみる。

散文／韻文の別について見てみると、ニホフは総用例数の半数近くを韻文の用例が占めるのに対し、「ニホヒ＋スル」のそれは未見である。「名詞＋スル」のうち、韻文に多用されるのは「カ＋スル」で、総計一四例が得られた。カは、中世後期以降、専ら単独で（＋の意味）を表す名詞として、また、複合名詞や慣用的表現（色香・移り香・梅ガ香）としてその表現価値を維持し続け、文章語化していく語である（池上二〇二二b）。こうしたカの位相を踏まえると、「カ＋スル」のみが韻文において使用されることは至極当然である。また、それは同時に、「カ＋スル」以外の「名詞＋スル」が、韻文よりも散文において多用される形式であることとを意味する。

このことは、資料ジャンルごとの用例数の分布からも明らかである。近世における俳諧などの韻文資料、談義本・読本・人情本（地の文）といった文語体資料には、同時代の他の言語資料が多量に用いられる「名詞＋スル」がほとんど使用されないのである。

つまり、ニホフは文章語・雅語的側面をも持つのに対して、「名詞＋スル」（特に、その代表格である「ニホヒ＋スル」）は多分に日常

語・俗語的側面を持つと考えられるのである。

(三) ニホフという語の二面性

ニホフは、意味の下降の過程にあっても単独で（＋の意味）を表し続けていた。ただし、その（＋の意味）を表す用例を「名詞＋スル」と比較し、対象・文体などの観点から分類し直すと、ある傾向が浮かび上がる。すなわち、（＋の意味）を表すニホフは鑑賞としての対象をとりやすく、文章語・雅語的側面をも持つという傾向である。単独で（＋の意味）を表すというニホフ本来の意味・用法が、こうした特定の対象・文体において必要とされ続けていたために、一見すると奇妙な印象を受ける。一語が（＋／－の意味）両方を表す、という意味・用法が成立したのである。しかし、限られた範囲であっても本来の意味・用法が保持され続けていれば、人によつては（－の意味）を表す語として積極的に使用しにくくなる、という事態が容易に想像できる。そこで、ニホフのように二面性を持たず、あくまで日常語的表現として使用される「名詞＋スル」（主に「ニホヒ＋スル」）が、（－の意味）を表す形式として使用しやすかつたのであろう。また、「名詞＋スル」が「表現の具体化への欲求」にも十分に応じられることも大きく影響していたと考えられる。

四 おわりに

ニホフの意味の下降は中古に始まり、中世を通じて進行し、近世において定着した。ただし、意味の下降が生じながらも（－の

意味) 専用の語とはならず、一語で(+) / (-)の意味) 両方を表すようになった点が、この語の意味変化の特徴だと言える。⁽¹⁸⁾ こうした意味・用法の成立を可能にしたのは、鑑賞としての対象をとる語、文章語・雅語的な語として、(+)の意味) を表すという本来の意味・用法が必要とされ続けたからであった。しかし、(+ / -)の意味) 両方を表すという、相反する二面性を維持し続けたことで、近世以前においては、(-)の意味) を表す語として広く定着するには至らなかった。そこで、口語的表現として認識されていた「名詞+スル」(主に「ニホヒ+スル」)が、修飾成分を伴った表現全体で(-)の意味) を表す形式として重宝されたのである。

ニホフと「名詞+スル」との関係は、語彙史研究における、品詞の枠を越えた類義表現にまで視野を広げる必要性を示している。今後は、しばしば属性形容詞的であると言われる知覚動詞としてのニホフを、カウバシヤ(くさし)といった形容詞を含めた語彙体系の中で再考していきたい。

注(1) 現代語では、(+の意味)カオル / (-の意味)ニオウといった棲み分けの傾向も指摘できる(小出二〇〇五)が、未だニオウ一語で両極の意味を表し得る。

(2) 感覚領域の変化を論じたものに柴生田(一九五九)などがある。「日本国語大辞典(第二版)」「におう」の語誌欄「万葉集」においては、赤系統を主体とする明るく華やかな色彩・光沢が発散し、辺りに映えるという、視覚的概念の用例が圧倒的で、「ニホフ」の「二」を「丹」と関連づける考えもあるが、「万葉集」末期(大伴家持)には、よい香が辺りに発散することにも用いられ始める。」も氏の立場を参考にしている。主に文学の分野で展開されてきた先行研究

は、佐藤喜代治編(一九八三)『語彙研究文献語別目録』(明治書院)に詳しい。なお、(-)の意味) を表す語群については、現代語「クサイ」を扱った玉村(一九八八)、古代語「クサシ」を扱った池上(二〇一八)がある。

(3) 名詞は、ニホヒ・カ・カザ・漢字表記「香」(カと読む可能性が高い)を調査したが、総用例数の多いニホヒを中心に論じる。池上(二〇一八)で明らかにしたように、(+ / 中立的 / -)の意味) を表す嗅覚表現名詞は、中世後期頃にカとニホヒとが交替し、近世以降はニホヒが優勢になるという個別の問題があるためである。表に掲載しないカ・カザ・漢字表記「香」の総計はそれぞれ、三二例・五例・一二例である。

(4) ニホフは、仮名表記や振り仮名によりニホフの読みが確実なものの、自動詞と判断できる「匂」(匂)はニホフのために作られた国字である(朱一九九八など)に限った。

(5) 今回の調査で得られた「(-)の意味) を表す修飾成分」は、(く)臭ニホフシ・悪シ・乙リキナリ・汚ラハシ・卦体ナリ・変ナリ・ムツカシなど。

(6) 意味の下降の捉え方については小野(一九八四)を参考にした。

(7) 上代 / 中古 / 中世前期 / 中世後期 / 近世前期 / 享保一〇年(一七二五) / 近世中後期の六つに区分した。なお、年代よりも資料ジャンルでまとめることを優先したため、近世中後期には一七二〇年代に成立したものの僅かながら含まれる。

(8) 調査結果には含めていないが、調点資料の調査(『調点語彙集成』(汲古書院)を利用)も行った。筆者が目を通すことのできた調点資料の限りにおいては、本稿の調査結果に矛盾する用例は未見である。

(9) 例③の寛政六年刊記古活字本のみならず、現在最古とされる九条家本(室町時代の写本(新日本古典文学大系)も「くさくにはひたる」とある。前後を校異した結果本文の大きな乱れは見られず、この箇所も原態を留めている可能性が低い。

(10) 『ラホ日辞典の日本語本文篇』(勉誠出版)を利用した。なお、一語単独で(一の意味)を表すニホフは見えず、『名詞+スル』はこの形式自体が見えない。

(11) (一の意味)を表す形容詞においては、単純形容詞クサシよりも合成形容詞クサシが多用されるようになる(池上二〇二二a)。

(12) 名詞ニホヒにも同様に指摘できる意味変化である(池上二〇二二b)。

参考文献

小野正弘(一九八四)『因果』と『果報』の語史―中立的意味のマイナス化とプラス化―『国語学研究』二四

工藤力男(二〇一〇)『におい彷徨―日本語雑記―』『成城文藝』二二〇

小出慶一(二〇〇五)『知覚動詞の語彙構造について』『群馬県立女子大学国文学研究』二二五

別表 調査対象資料(一部)

紙幅の関係上、用例の得られた資料を中心に、調査対象の一部を示す。調査には、既刊の総索引・テキストの他、国文学研究資料館『日本古典文学大系データベース』、日国オンラインも利用した(*は全数調査を終えていない資料に付す)。

●上代古事記・日本書紀・万葉集●中古『仮名散文Ⅰ期』伊勢物語・土左日記・大和物語・平中物語・宇津保物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・和泉式部日記・源氏物語・紫式部日記・栄花物語・浜中納言物語・堤中納言物語・更級日記・狭衣物語●中世前期『仮名散文Ⅱ期』讃岐典侍日記・大鏡・今鏡・とりかへばや物語・篁物語・松浦宮物語・無名草子・百詠和歌・源通親日記・無名抄・たまきはる・うたたね・十六夜日記・中務内侍日記・徒然草・竹むきが記・とはすがたり・増鏡【説話】(宗教関係資料含む)今昔物語集・古本説話集・打聞集・唐物語・発心集・宇治拾遺物語・閑居友・今物語・撰集抄・十訓抄・古今著聞集・沙石集・親鸞集三帖和讃・日蓮聖人遺文・梅尾明恵上人伝記・梅尾明恵上人遺訓・一言芳談【和漢混清文Ⅰ期】(漢文資料含む)雲州往來・水鏡・方丈記・保元物語・平治物語・平家物語・海道記・東関紀行・源平盛衰記●中世後期【和漢混清文Ⅱ期】曾我物語・義経記・太平記・信長公記【室町物語】あしびき・転寝草紙・しぐれ・鴉鷲物語・岩屋の草子・かざしの姫君・高野物語・西行・俵藤太物語・弁慶物語・毘沙門の本地・猿の草子・師門物語・さ、やき竹・大黒舞【抄物】杜詩統翠抄・漢書抄・百丈清規抄・史記抄・日本書紀兼俱抄・古文真宝桂林抄・古文真宝彦龍抄・山谷抄・湯山聯句抄・蒙求抄・莊子抄・毛詩抄・四河入海・二体詩幻雲抄・中興禅林風月集抄・玉塵抄・全九集・句双紙抄・中華若木詩抄・論語抄【クリシタン資料】天草本平家物語・天草本伊曾保物語・天草本金句集・コンテムツスムンチ・ぎやどべかどる・どちりなかりしたん【狂言台本】天正狂言本・祝本【その他】さ、めごと・連理秘抄・申楽談儀・あづまの道の記・河村喜真問書・地藏菩薩靈驗記●近世前期(一七七二五)【狂言台本

小林隆(一九八四)『変化の要因としての語彙体系』『国語学研究』二四
柴生田稔(一九五九)『かをる』と『にほふ』『国語と国文学』三(一
九八六)『万葉の世界』岩波書店(所収)

朱 捷(一九九八)『句』という字の由来及びそこからみる日本人の嗅覚と中国人の聴覚『同志社女子大学日本語日本文学』一〇

玉村千恵子(一九八八)『嗅覚と非嗅覚―合成語―くさい』をめぐって『日本語』一・六

A・コルバン(山田登世子・鹿島茂訳)(一九九〇)『においの歴史―嗅覚と社会的想像力』藤原書店

E・ミンコフスキー(中村雄二郎・松本小四郎訳)(一九八三)『精神のコスモロジーへ』人文書院

池上 尚(二〇二二a)『嗅覚表現形容詞「クサシ」』『クサシ』―接尾辞「クサシ」の発達を中心に―『国語語彙史の研究』三二

(二〇二二b)『嗅覚表現名詞ク・ニホヒの史的变化―その交替に着目して―』『早稲田日本語研究』二二

【I期】虎明本・天理本・虎清本・和泉家古本・狂言記・忠政本・狂言記外・統狂言記【仮名草子】酒茶論・大枕・恨の介・大坂物語・竹齋・薄雪物語・尤之双紙・清水物語・伊曾保物語・仁勢物語・是染物語・為戀物語・ねごと草・浮世物語・元の木阿弥・都風俗鑑・好色福鑑【浮世草子】好色訓蒙図彙・好色貝合・男色十寸鏡・好色破邪頭正・好色通交歌占・人倫糸屑・好色万金丹・好色大福帳・新色五卷書・けいせい色三味線・風流曲三味線・古今堪忍記・けいせい伝受紙子・傾城禁短氣・世間娘氣質・国姓翁明朝太平記・傾城手管三味線・傾城歌三味線・當世宗匠氣質【評判記】難波物語・野郎・古々たきつけ草もえくろけしすみ・色道大鏡・難波鉦・名女情比【癖本I期】戲言叢氣集・寒川入道筆記・醒睡笑・きのふはけふの物語・わらいくさ・百物語・私可多咄・理屋物語・一休はなし・狂歌咄・竹齋はなし・鹿野武はなし・一休諸国物語・秋の夜の友・宇喜藏主古今咄揃・當世輕口咄揃にがわらひ・雜物語・古楊枝・輕口大わらひ・當世手打笑・當世口まね笑・鹿野武はなし・輕口御前男・輕口ひやう金房・輕口あられ酒・露休置土產・輕口福藏主【井原西鶴作品】好色一代男・難波の兎は伊勢の白粉・諸艶大鑑・西鶴諸国はなし・輕口御前男・輕口ひやう金房・好色五人女・本朝二十不孝・男色大鑑・武道伝來用・懐視日本永代藏・武家義理物語・嵐は無常物語・色里三所世帯・新可笑記・好色盛衰記・本朝校陰比事・一目玉鉾・新吉原つねぐさ・世間胸算用・浮世花一代男・西鶴置土產・西鶴雜留・西鶴つれづれ・万の文反古・西鶴名残の友・俳諧石車・難波土產・精進繪・俳書発句その他【浄瑠璃I期】(近松)出世景清・三世相・津戸三郎・蟬丸・十二段・最明寺殿百人上臈・日本西王母・曾根崎心中・用明天王職人鑑・堀川波鼓・心中重井筒・五十年忌歌念仏・卯月の潤色・淀裡出世清徳・基盤太平記・心中万年草・孕常盤・吉野都女楠・冥途の飛脚・薩摩歌・今宮心中・堀山姥・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・大經師昔塵・嘉平次おさが生玉心中・国性爺合戦・聖德太子絵伝記・博多小女郎波枕・山崎与次兵衛寿の門松・曾我合稽山・傾城酒吞童子・平家女護鴨・傾城烏原蛙合戦・心中天の網島・双生陣田川・女殺油地獄・信州川中島合戦・心中宵庚申・浦島年代記【近世雜I期】室町殿日記・理慶尼の記・おあむ物語・捷解新語・おきく物語・雜兵物語・女重宝記・町人糞・それぐ草・ひとりね・槐記【俳諧I期】犬子集・毛吹草・埋木・芭蕉文集句集・真蹟去來文*・三冊子・風俗文選●近世中後期【浄瑠璃II期】心中恋の中道・心中二つ腹帯・八百屋お七・壇浦兜軍記・猿八太夫鹿巻・ひらかな盛衰記・夏祭浪花鑑・神盡矢の丞本・名女川本・虎寛本・虎光本・雲形本*・賢通本【談義本】艶道通鑑・田舎莊子・風俗文集・昔の反古・當世下手談義・風流志道軒伝・根南志具佐・根無草後編・當世六さがし・遊婦多奇数・成仙玉【近世雜II期】交隣隨筆【四方のあか・癩癖談・玉勝間・道二翁道話・膽大小心録・形影夜話・山中人饒舌・松翁道話・蘭東事始・花月草紙・紹鷗茶湯百首・鳩翁道話・玲瓏隨筆【癖本II期】輕口はなしとり・輕口機嫌・座狂ばなし・輕口独機嫌・輕口蓬萊山・水打花・輕口耳過宝・輕口へそ順礼・輕口腹太鼓・鹿の子餅・奥牽頭・輕口大黒柱・聞上手・飛談話・坐笑聲・口拍子・今年咄・聞上手二篇・近日貫・御伽新・再成餅・都鄙談話三篇・仕形新・絵本珍宝舛・新輕口初商ひ・輕口五色帯・茶のこち・一ものり・和時勢話綱目・喜美佐羅樂・頓作万八噺・売言葉・鳥の町・一の富・立春噺大集・高笑ひ・夕涼新話集・書集津盛噺・年忘斷角力・春伶・管卷・時勢話大全・笑長者・豆談話・梅屋歌・嗚呼笑・話問評・春帖咄・歲旦話・夜明梅の笑・滑稽即興噺・來鳥ひ・福喜多留・下司の智恵・百福物語・千年草・かたいはなし・うぐひす笛・福種笑門松・振鷲亭斷日記・富貴樽・拍子幕・落咄梅の笑・滑稽即興噺・來鳥ひ・福喜多留・下司の智恵・百福物語・即當笑合・喜美談話・噺手本忠臣蔵・雅興春の行衛・臍が茶・庚申講・三歳智恵・無事志有意・新玉簪・塩梅余史・意欲常談・新製欣々雅話・齋前茶吞噺・虎野のたけ・曲雜話・馬鹿大林・太郎花・六冊懸徳用草紙・新撰勸進話・落咄餅くり金・珍學問・花の咲・麻疹噺・東都真衛・笑府商内上手・はなし龜・しみのすみか物語・映葉林・落咄見せびらき・誦話江戸噺笑・正月もの・飄百集・笑顔始・玉尺一九噺・画ばなし当時梅・妙伍天連都・臍の宿かえ・会席斷袋・福三笑・身振噺寿賀多かこひもの落し噺し・女郎買の落し噺し・十二支紫・延命養談数・落噺年中行事・笑語草かり籠・一口ばなし・百面相仕方ばなし・縁取ばなし・昔は

なし・落しばなし・俳諧発句一題晰・万燈賑ばなし・春色三題晰初編【洒落本】史林残花・南花余芳・両都妓品（西都妓品・両巴危言）・吉原源氏六十帖評判・傾城つれく草・晴陽英華・会海通窟・白増譜言経・百花評林・瓢金窟・華里通商考・華里通商考（異本）・阿房枕言葉・仙台治情・烟花漫筆・妬婦伝・猪の文章・当世花街談義・吉原出世鑑・交代鑑采記・詠楽説論談・魂胆総勘定・本草妓要・禁現大福帳・花富浦待乳問答・穿当珍話・風俗七遊談・風俗八色談・西郭燈籠記・異素六帖・聖遊廓・花街浪華色八掛・秘事真告・遊子方言・辰巳之園・風流醉談議・甲駢新話・当世爰かしこ・郭中掃除雜編・傾城買指南所・富賀川拝見・蛇蛻青大通・叩地吳意・つれづれ眸か川・傾情知恵鑑・殘座訓・通言総離・青樓登之世界錦之裏・傾城買二筋道・廓節要・老様志【賣表紙】高漫齋行脚日記・莫切自根金生木・大悲千祿本・江戸生艶氣權機・心学早染艸・敵討義女英・賢愚湊錢湯新話・仙術独稽古【読本】兩月物語・椿説弓張月・春雨物語【滑稽本】風来六部集・戲男伊勢物語・東海道中膝栗毛・戲場粋言葉の外・浮世風呂・狂言田舎探・浮世床・大千世界楽屋探・七偏人【人情本】仮名文章娘節用・春色辰巳園・春色梅児譽美・貞操婦女八賢誌・春色恵の花・花の志満台・いろは文庫・関情末摘花・清談若緑・春色恋廻染分解【俳諧Ⅱ期】（川柳含む）与謝蕪村作品・小林一茶作品・鶉衣・誹風柳多留・伊勢冠付・神酒の口

付記 本稿は日本語学会二〇一一年度春季大会における口頭発表の一部を

基に加筆・修正したものである。発表の際、多くの先生方に「指摘・

」教示を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

なお、池上（二〇二二a）は、現代語研究であるものの重要な先行

研究である玉村（一九八八）の検討を経ずに稿をなした部分があった。

先学の研究成果を十分に取り入れられなかったことをお詫び申し上げます。

先行研究を踏まえた上で池上（二〇二二a）の再考は、別稿を

期したい。

新刊紹介

大倉比呂志著

『物語文学集攷』

—平安後期から中世へ—

本論集は、平安後期から中世にかけての物語を対象としており、著者のこれらの時代における物語文学研究の集大成であると

言えるものである。

特筆すべきは研究対象とした作品数の多さである。平安後期物語は八作品、中世王朝物語は二十一作品もの物語を論究の対象としている。さらに、取りあげた作品の全

てにおいて、人物造型とその意味性、ジェンダー、先行する文学作品の影響およびそれらとの（同化）（異化）をはじめとする重要な諸問題が取りこぼすこと無く丁寧に論じられている。

また、物語文学のみならず、第三部の

「とはずがたり」と物語文学」においては著者が以前から研究を続けている日記文学との相関関係を追求するという試みが為されており、中古から中世における文学全体に対する包括的な研究書として印象深い一書である。

（二〇一三年二月 新典社 A5判 五七四頁 税込一七三二五円）〔木田博子〕